

令和元年6月27日現在

機関番号：34603

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16753

研究課題名(和文) トートロジー発話の理解と産出に関する総合的研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Study of Children's Comprehension and Production of Tautology

研究代表者

山本 尚子 (YAMAMOTO, Naoko)

奈良大学・社会学部・准教授

研究者番号：90573436

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、子どもによるトートロジー発話の理解と産出の実態を、他の修辞表現との比較を通して明らかにするものである。まず、データベースなどから、子どもによるトートロジー発話の産出例を収集し、その特徴を明らかにした。また、トートロジーの理解に関する質問紙法による調査を行い、児童にとって、トートロジーは、シミリーよりも理解しにくいこと、トートロジーを理解する力は、児童期には大人と同程度の理解には達さないこと、メタファーやアイロニーとは異なり、子どもがトートロジーを理解しようとする時、Winner(1988)が提案する文字通りではないことばを理解する3ステップすべてにおいてつまづくことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来のトートロジー研究とは異なり、子どもによるトートロジー発話の理解と産出に注目したものである。また、データベースなどの検索結果や質問紙法による調査から得られたデータを用いながら、メタファーやアイロニーといった他の修辞表現との関係性に着目した研究である。そのため、ほとんどの言語に普遍的に存在する名詞句トートロジー発話の解釈メカニズムの全体像を、子どもの言語獲得の観点から解明する上で大変意義がある。その研究成果は、人間の言語認知における普遍的な機能の解明に関わっているだけでなく、今日活発に議論されている修辞表現に関する研究や子どもの言語獲得に関する研究にも大きな貢献が期待される。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to clarify children's comprehension and production of tautology, comparing tautology with other figurative expressions such as simile, metaphor and irony. First, I collect children's tautological utterances from various language sources such as databases and children books, and describe their characteristics. Next, based on the findings of my experiment with Japanese schoolchildren, I show that elementary school students have greater difficulty in understanding tautology than simile; unlike simile, there is no significant developmental change in the ability to comprehend tautology during childhood, suggesting that the ability develops in the years after elementary school; unlike metaphor and irony, children fail at the three steps in Winner's (1988) scheme of understanding non-literal expressions; and finally, there appears to be a correlation between the development of understanding tautology appropriately and that of reading the intention of others.

研究分野：言語学

キーワード：トートロジー 修辞表現 言語獲得 関連性理論

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「トートロジー」という語は、様々な分野で用いられている。特に言語学の分野では、日本語の「仕事は仕事だ」や英語の Business is business といった名詞句トートロジーを主な研究対象とし、<一見すると聞き手に対して新しい情報を何も与えず、冗長なもののように思われる表現が、なぜ実際の発話文脈において有意義なものとして解釈されるのか>という問いを解決することを目指している。大まかに言えば、名詞句トートロジーに関する先行研究には、従来の語用論的アプローチを採用する研究、意味論的アプローチを採用する研究、前者2つの折衷案的アプローチを採用する研究、認知言語学的アプローチを採用する研究、関連性理論(認知語用論)に基づく研究がある。また、従来の研究では、主に A is A という単一の形式で表される英語の名詞句トートロジーを分析対象としているため、日本語の多様な名詞句トートロジー表現形式(「AはAだ」、「AがAだ」、「AもAだ」)を説明できないという問題点があった。それらの問題点に注目したものが、山本(2013b)や Yamamoto(2014)をはじめとする本研究代表者の一連の研究である。

以上に示したように、トートロジーに関する研究は、様々な観点から行われているが、実験に基づくトートロジー研究はほとんど行われていない。また、発達心理学分野において、子どもによる、字義的な意味と話し手の意味とのギャップが大きい言語表現(メタファーやアイロニーといった修辞表現)の理解に関しては数多くの研究が行われているが、トートロジー発話そのものの理解や、トートロジーとメタファーやアイロニーといった他の修辞表現との関係性に関する言及はない。そこで、本研究課題では、従来のトートロジー研究とは異なり、実験結果を通して、子どものトートロジー発話の理解と産出に関わる側面を明らかにする。

2. 研究の目的

本研究課題は、実験(質問紙法による調査)から得られるデータに基づき、子どものトートロジー発話の理解と産出の実態を明らかにすることを目的とする。そして、その研究成果に基づき、ほとんどの言語に普遍的に存在する名詞句トートロジー発話の解釈メカニズムの全体像を、言語獲得の側面から解明する糸口をつかむことを試みる。

3. 研究の方法

本研究課題は、子どもによるトートロジー発話の理解と産出のプロセスに関連する側面を明らかにするため、まず、データベース(英語版 CHILDES、日本語版 CHILDES)や絵本、子ども向けの番組などから、子どもによるトートロジー発話の理解および産出の実態を抽出し、その特徴を示す。次に、その結果に基づき、トートロジーとシミリーの理解を比較する質問紙法による調査を行い、修辞表現理解の発達プロセスにおける、トートロジー発話の理解と産出の位置づけや、他の修辞表現との関係性を明らかにする。

4. 研究成果

・子どもによるトートロジー発話の産出に関わる側面

まず、データベース(英語版 CHILDES、日本語版 CHILDES)や子どもの発話をまとめた書籍、絵本、幼児向けの映像(テレビ番組、映画)などから子どもによるトートロジー発話の産出例を集め、今まで見えてこなかった産出に関わる側面について考察した。

名詞句トートロジー「AはAだ」という表現を用いる場合、文脈が整えば、Aに相当する名詞(句)にはかなりの多様性が認められる。そのため、一見すると、子どもによる産出も容易であるように思われる。だが実際には、トートロジーを産出しようとする、名詞(句)Aという語の側面だけではなく、まったく同じ名詞(句)Aを結びつけるという一種の構文的な側面も関わってくるので、子どもにとって産出のハードルはかなり高くなる。シミリーやメタファーの場合とは違い、子どもが実際にトートロジーを発している事例を量的分析ができるほど集めることはできなかった。だがそのような中でも、次のような興味深い例を集めることができた。

- (1) お風呂で一人、頭を洗いながら独り言。

「妹はいつまでたっても妹……」

(朝日新聞出版(編)(2009:95)『あのね 子どものつぶやき』)

- (2) 「落ち込んでいる人にはね、まず歌ってもらうんです。ピンチ、ピンチ、チャンス、チャンス、ラン、ラン、ラン♪ってね」

患者さんのメンタルな指導も受け持っている K 医師は言った。「あめ、あめ、ふれ、ふれ、かあさんが……」の替え歌だ。それを聞いて、一緒にランチを食べていた息子が言う。

「ヘンなの！ ピンチはピンチ、チャンスはチャンスでしょ。」

(俵万智(2013:253-254)『ちいさな言葉』)

(1)は、朝日新聞生活面の「あのね」という投稿欄に寄せられた、子どもたちのつぶやきをまとめた本から収集したものである。前後の文脈がないので、具体的な特性を特定することはできないが、発話者である6歳女兒は、その妹が持つ何らかの特性が変わらないことを、当該発話によって伝達していると考えられる。(2)は、歌人である著者が、息子とのことばのやりとりの

中で興味を覚えた表現や発想を書き留めたエッセイから収集したものである。小学校3年生のときのエピソードとして紹介されている。「ピンチはピンチ、チャンスはチャンスでしょ」というトートロジーは、著者の息子が、「ピンチ」と「チャンス」という2つの語(概念)を(ほぼ)同一視するK医師に対して反論するために発せられたものである。

子どもによる産出例が数多く報告されているシミリーやメタファーとは異なり、トートロジーの事例を数多く収集することはできなかった。だが、(1)と(2)から、6歳女児も小学校3年生男児も、実際の発話文脈において、適切にトートロジー発話を産出していることがわかる。用例数が少ないので、断言することはできないが、トートロジー発話は、小学校入学前後ごろから産出可能であると言えるのではないだろうか。

また、アスペルガー症候群の特性を持つ児童がトートロジーを発する例も収集した。

- (3) 私は、うるさすぎて学校も行っていない。なのでクラスにどんな子がいるかも知りません。お母さんに「周りみんな知らん子やんか～。それは別にいいの?」と聞かれました。私は「だって、知らない子は、知らない子やろ～、それは全然いいねん」という返事をしました。(高橋紗都・高橋尚美(2008:27)『うわわ手帳と私のアスペルガー症候群』)

(3)は、アスペルガー症候群である10歳女児が、自身が生きている世界について綴った本から収集したものである。ここでは、「知らない子」というまったく同じ表現を結びつけることによって意味をなす表現を、母親に対する返答として用いている。健常児と比較すると、障害を持つ子どもは、メタファーやアイロニーの理解に困難が伴うことが、様々な実験結果から指摘されている。アスペルガー症候群や自閉症など何らかの障害を持つ子どもが、いつごろからどのようなトートロジーを理解できるようになるのか、また、産出するようになるのかについては、今後さらなる検討が必要となるであろう。

以上、様々な言語資源から収集したトートロジーの産出例を考察した。シミリーやメタファーの場合とは異なり、子どもによる産出事例は極端に少なかった。だが、今回の事例研究から、子どもを取り巻く環境に、トートロジー表現は確かに存在しており、子どもによって適切にトートロジー表現が産出される場合があると言える。

・子どもによるトートロジー発話の理解に関わる側面

<山本(2018)>

修辞表現の理解に関するさまざまな先行研究を踏まえると、子どもは、シミリー、メタファー、アイロニーの順で理解できるようになると考えられる。では、このような修辞表現理解の発達プロセスにおいて、トートロジーはどこに位置づけられるのだろうか。その疑問を解決するために、まず、山本(2018)では、修辞表現理解の発達プロセスの初期に位置づけられるシミリーと、トートロジーの理解を比較する質問紙法による調査(調査対象者:日本語を母語とする小学校1年生から6年生までの193名)を行った。また、子どもによる理解と大人による理解を比較するために、大学生20名を対象に同様の調査を行った。

本調査では、調査対象者に対して、3つの選択肢を含む文章を読み、下線が引かれた当該表現が表している内容として当てはまる選択肢に「○」、当てはまらない選択肢に「×」を解答欄に記入するように求めた。問題によっては、解答として2つ考えられるものもある。問題数は計10問(「トートロジーの理解を問う問題」1、「シミリーの理解を問う問題」1、「コントロール群」)である。例えば、トートロジーの理解を問う問題として(4)-(7)を、シミリーの理解を問う問題として(8)を、コントロール群として(9)-(10)を用いた。

- (4) [6歳の女の子が、お風呂で一人、頭を洗いながら独り言をいっている。]
「妹はいつまでたっても妹」 (『あのね 子どものつぶやき』)
a. 妹は、ずっと変わらない。
b. 妹は、同じ親から生まれた年下の女の子だ。
c. 6歳の女の子は、妹を赤ちゃんのようにあつかっている。
- (5) [さかなは、世の中を見て回る決心をし、岸へ飛び出した。しかし、岸の上では、身動きがとれない。そこに、友だちのかえるが通りかかり、さかなを池に戻してくれる。池に戻ったさかなは、自由に動くことができる。]
ひの ひかりが みずくさの なかに さしこみ、 かがやく いろの もようを やさしく ゆらした。この せかいこそ、たしかに どんな せかいよりも うつくしい せかいだった。かれは、すいれんの はっぱに すわっている ともだちの かえるに ほほえみかけた。「きみの いったとおりだよ。」 かれは いった。「さかなは さかなさ。」 (『さかなはさかな』)
a. かえるは、さかなにほほえんだ。
b. さかなは、水の中でしか生きられない。
c. さかなは、宝石のように光り輝く水の中で泳いでいる。
- (6) 「落ち込んでいる人にはね、まず歌ってもらうんです。ピンチ、ピンチ、チャンス、チャンス、ラン、ラン、ラン♪ってね」
患者さんのメンタルな指導も受け持っているK医師は言った。「あめ、あめ、ふれ、ふ

れ、かあさんが「……」の替え歌だ。それを聞いて、一緒にランチを食べていた息子が言う。

「ヘンなの！ピンチはピンチ、チャンスはチャンスでしょ。」 (『ちいさな言葉』)

- a. ピンチは、チャンスとは別物だ。
- b. ピンチは、チャンスと一緒にやってくる。
- c. 息子は、ピンチとチャンスは違うと K 医師に反論している。

- (7) [日曜日の午後。たかしくんは、お父さんと遊びたい。だが、お父さんは、書斎で仕事をしている。]

たかし：ねえ、日曜日だし、遊ぼうよ。

お父さん：今は忙しいんだ。あとでな。

たかし：あとっていつ？

お父さん：あとはあとだ。むこうで、お兄ちゃんたちと遊んできなさい。

a. たかしくんは、お兄ちゃんと遊んだあとに、お父さんと遊べる。

b. お父さんは、たかしくんといつ遊べるか言いたくない。

c. お兄ちゃんたちは、たかしくんとテレビゲームをして遊ぶ。

- (8) スイミーは およいだ、くらいうみの そこを。こわかった、さびしかった、とても かなしかった。けれど うみには、すばらしい ものが いっぱい あった。おもしろい ものを みる たびに、スイミーは だんだん げんきを とりもどした。にじいろのゼリーのようなくらげ…… (『スイミー』)

a. くらげは、光り輝いている。

b. くらげは、七色のゼリーだ。

c. にじは、すきとおるほどきれいだ。

- (9) お母さんは、まりこさんに、「買い物から帰ってくるまでにお部屋をそうじしておくのよ」といって、オムライス材料を買いにでかけました。そのあと、まりこさんは、部屋をそうじしました。家に帰ってきたお母さんは、まりこさんの部屋を見て、「きれいなお部屋ね」といました。

a. まりこさんの部屋は、きれいだ。

b. まりこさんは、オムライスが大好きだ。

c. お母さんは、たくさん買い物をしてつかれている。

- (10) 教室が少しむし暑くなってきたとき、国語の山口先生が、窓ぎわにすわっている花子さんに、「窓、開けられるかな？」とおっしゃいました。 (大津・窪園 (2008: 136) 改作)

a. 山口先生は、窓を開けることができるかたずねている。

b. 花子さんは、国語が得意だ。

c. 山口先生は、窓を開けてほしい。

先に示した調査方法で得られた結果を踏まえ、まず、トートロジーとシミリーの理解に関する比較を行った。表 1 は、トートロジーの理解を問う問題とシミリーの理解を問う問題の平均正答率を学年ごとに示したものである。

学年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
トートロジーの理解を問う問題	32%	39%	35%	42%	51%	44%
シミリーの理解を問う問題	58%	63%	56%	80%	82%	87%

表 1：トートロジーおよびシミリーに関する問題の平均正答率

トートロジーとシミリーの理解力に関する比較を通して、子どもによるトートロジー理解にはかなりの困難さが伴うこと、トートロジーでは、シミリーと同じようなある特定の時期に起こる大きな発達的变化が児童期に認められないこと、児童期にはトートロジーの理解能力が十分に発達しておらず、小学校卒業以降のいずれかの時期にその能力が発達しうることが、明らかになった。したがって、シミリー、メタファー、アイロニーという修辞表現理解の発達プロセスにおいて、トートロジーは、シミリー以後のいずれかに位置づけられると結論づけられる。

次に、先に挙げた、「窓、開けられるかな？」(10)と「あとはあとだ」(7)に関する考察を通して、トートロジーを適切に理解するためには、発話者の意図を読み取る力としての発達が鍵となることが明らかになった。まず、「窓、開けられるかな？」の解釈として、当該疑問文を文字通りに何かを尋ねる疑問文ととらえる場合と、何かを依頼している依頼文ととらえる場合と、2通りの可能性が考えられる。前者のように解釈すれば、(10a)（「山口先生は、窓を開けることができるかたずねている」）を選択し、後者のように解釈すれば、(10c)（「山口先生は、窓を開けてほしい」）を選択する。調査の結果、1年生から4年生では、<(10a)(10c)ともに選択>が<(10c)のみを選択>を上回っていた。だが、5年生では、両者はほぼ拮抗し、6年生では、その関係が逆転した。このような結果は、5年生ごろを境に、依頼文ととらえられる疑問文に対する解釈の仕方に、発達的变化が見られることを示している。一方、「あとはあとだ」については、90%の大学生は、正答として(7b)（「お父さんは、たかしくんといつ遊べるか言い

たくない」)を選択した。この選択肢は、息子と遊ぶ具体的な時間帯(発話時以降のいずれかの時間帯)に関する言及ではなく、そのような明確な言及を避けたいという意図を示している。しかしながら、小学生には、このような父親の意図は感じられなかったようだ。1年生、2年生では、父親が息子と遊ぶ具体的な時間帯を示す(7a)('たかしくんは、お兄ちゃんと遊んだあとに、お父さんと遊べる')が選択される割合が多かった。その後、学年の上昇とともに(7b)を選択する割合がゆるやかに増加していき、6年生でも、その選択率は55%であった。

ここで、相手の意図を理解する力とトートロジー発話を理解する力の関連性について統計的分析を行っておきたい。各学年におけるそれぞれの正解人数と不正解人数の組み合わせを、 χ^2 検定を用い統計的に処理した。その結果、1年生から5年生まででは、両者の間に統計的に有意な差は認められなかった。だが、6年生では、統計的に有意な差が認められた($p < .05$)。このような結果は、6年生において相手の意図を理解する力とトートロジー発話を理解する力の間に何らかの相関が見られることを示唆している。

< Yamamoto (2019) >

Yamamoto (2019)では、山本 (2018)による日本語を母語とする小学生を対象とした調査結果を用い、トートロジーを理解する際、子どもは、Winner (1988)が提案する文字通りではないことばを理解する3ステップのすべてにおいてつまづくこと、その理解には、メタファーともアイロニーとも異なる性質の難しさを伴うことを明らかにした。このような結論は、トートロジーの理解プロセスがより高度な処理能力を要求することを示唆している。

Winner (1988)は、メタファー理解とアイロニー理解にはそれぞれ異なる難しさがあり、理解に要する能力が異なっていると述べている。彼女によると、文字通りではないことばを理解するプロセスは、以下のような3ステップに分けられる。

- (11) a. *Detection of nonliteral intent.* At some level, whether consciously or not, the hearer must recognize that the utterance is intended nonliterally: he must realize that the speaker does not mean what he says, and that he means something very different from what he says. [step 1]
- b. *Detection of the relation between sentence and speaker meanings.* The hearer must discover the relation between what is said (but not meant) and what is meant (but not said). [...] As with step 1, this step need not be carried out at the level of conscious awareness. [step 2]
- c. *Detection of speaker meaning.* The hearer must infer the message that the speaker intends to convey, and he does this on the basis of the relation that he perceives between what is said and what is meant. [...] [step 3]

(Winner (1988: 10-11))

以上のステップを踏まえ、トートロジーの誤りについて考える。まず、「妹はいつまでたっても妹」(4)についてである。これは、発話者の妹が持つ何らかの特性が変わらないことを伝達しているので、正答は(4a)('妹は、ずっと変わらない')となる。調査対象者は、(4b)('妹は、同じ親から生まれた年下の女の子だ')とともに(4a)を選択する傾向が強かった。これは、子どもは、トートロジー的解釈と辞書的解釈を区別することが難しく、当該発話が文字通りではないことを認識することができていないことを示している。したがって、アイロニーの場合と同様、トートロジー理解のつまづきは、第1ステップで起きていると言える。

次に、「さかなはさかなさ」(5)についてである。この正答は(5b)('さかなは、水の中でしか生きられない')である。各学年の(5b)を選択した割合は比較的高かったが、興味深いことに、次に多く選ばれた選択肢は(5c)('さかなは、宝石のように光り輝く水の中で泳いでいる')であった。(5c)は、類似性を示す「ような」を含み、シミリーの一種だと言える。このような結果は、たとえ子どもが、トートロジー発話を文字通りのことばで言い表せないものだと気づいたとしても、言われたことと意図されたこととの関係がどのようなものであるかを見出すことができていないことを示している。したがって、メタファーの場合と同様、トートロジー理解のつまづきは、第2ステップにおいても起きていると言える。

最後に、「ピンチはピンチ、チャンスはチャンスでしょ」(6)について考える。当該発話の正答は(6a)('ピンチは、チャンスとは別物だ')と(6c)('息子は、ピンチとチャンスは違うとK医師に反論している')である。しかしながら、両者をともに選択した割合は極端に低く、各学年とも40%程度であった。これは、子どもが他者の意図を推測する十分な能力を持っておらず、意図されたことを適切に理解できていないことを示している。したがって、調査対象者は、話し手が意図していることを推論することができていないので、第3ステップにもたどりつくことができていないと言える。

以上の考察から、トートロジーを理解する際、子どもは、Winner (1988)が提案する文字通りではないことばを理解する3ステップすべてにおいてつまづくこと、メタファーやアイロニーと同様、トートロジーは文字通りのことばではないが、その理解には、メタファーともアイロニーとも異なる性質の難しさを伴うことが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3件)

1. Yamamoto, Naoko (2019) “An Experimental Analysis of Children’s Misunderstanding of Tautology” *Memoirs of Nara University*, No peer review, 47: 109-118, Nara University .
2. 山本尚子 (2018) 「子どものトートロジー理解に関する一考察」『奈良大学紀要』査読無, 46: 67-79, 奈良大学 .
3. 山本尚子 (2016) 「否定表現の特性に関する一考察—トートロジーの用例を中心に—」, 『日本英語学会第33回大会研究発表論文集 (JELS 33)』査読無, 202-208 .

〔学会発表〕(計 3件)

1. Yamamoto, Naoko (2018) “An Experiential Analysis of Children’s Misunderstanding of Tautology,” Presentation at the 26th Annual Meetings of the European Society for Philosophy and Psychology, The University of Rijeka, Rijeka, Croatia.
2. 山本尚子 (2015b) 「否定表現の特性に関する一考察—トートロジーの用例を中心に—」, 日本英語学会第33回大会研究発表, 関西外国語大学 .
3. Yamamoto, Naoko (2015a) “Tautology and Denial,” Presentation at the 14th International Pragmatics Conference, The University of Antwerp, Antwerp, Belgium.

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況 (計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号 (8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。